

黒井健さん

[絵本作家、イラストレーター]



本気で叱られた「いい思い出」

小学校で一番好きだったのは5年生の時の担任の先生です。とても温厚な女性の先生だったのですが、一度、廊下に立たされて驚くほどきつく叱られたことがあります。理由は、肌寒い雨が降る校庭で、先生の注意を無視して友達と遊んでいたためでした。

先生は、単純な腹立ちやストレスのはけ口で怒ったのではありません。本当に私たちの身体を心配してくださっていたのです。その証拠に、目にはうっすら涙を浮かべておられました。子ども心にも先生の心根のようなものが感じられたのでしょう。今もはっきり記憶に残っています。

先生とは、絵本作家になった後で再会する機会がありました。「こんなに立派になって！」と誉めてくださいましたが、私はすっかり生徒の気分。面映いような、不思議な感じでした。

感じたままに描いた『ごんぎつね』

小学校時代から図画工作は得意で、特に模型作りが好きでした。そこから建築家、次にグラフィックデザイナーをめざすようになりましたが、その受験に失敗し、教育学部美術科に入学。卒業後はとにかく絵のそばにいたくて出版社の絵本編集部に入りました。しかし、やっぱり自分で描きたくなくて2年後にフリーランスになりました。

私が『ごんぎつね』と出会ったのは、フリーランスのイラストレーターにな

って2年後のことでした。

このころの私は、絵本の絵はかわいい、明るい絵が喜ばれると思っていました。ところが、どんなにたくさん描いても、本屋に私の絵本がいっこうに並ばない。いったいどう描けばいいのか、自暴自棄になっていました。

『ごんぎつね』は、それまでの絵本に対する概念を捨て、感じたままに描いた作品です。物語を何度も読み返し、文章に書かれている空気感や音を自分の中に取り込んで描いた、画家の読書感想とも言えるものでした。

これ以降、私の作品への姿勢は大きく変わりました。よく「作品を通して何を伝えたいか」と聞かれますが、私の絵は、何かを伝えるというよりは、物語をどう受け取ったか、自分の思いを描き切ったものだと思います。

『ごんぎつね』との出会いがなかったら、今の私はなかったでしょう。

心のささくれを解決しないで

『ごんぎつね』のおもしろさは、起承転結に収まらず、最後に悲劇的な余韻を残してしまうところにあると思います。起承転結ができすぎた作品は心に何も残しません。『ごんぎつね』は、心に何か引っかかる「ささくれ」を残して終わります。

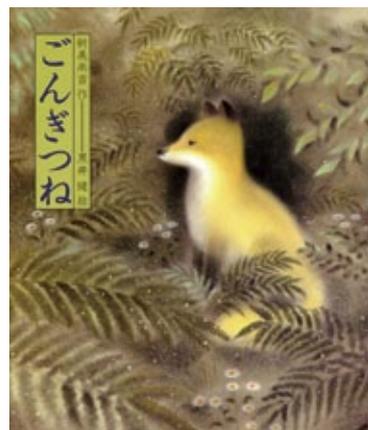
先生方には、この「ささくれ」をそのまま残しておいていただきたい。子どもの心に浮かんだいろいろな感じ方を、一つの方向に導く必要はないと思うのです。

物語の結論を「これが正しい」と教え込もうとしても、心には何も届きません。大事なのは、どんな感じ方も否定せず、それぞれの感受性を認めてあげることだと思います。

物語のドキドキ感を伝えてほしい

『ごんぎつね』の朗読で、私が最高だと思うのは、俳優の大滝秀治さんです。大滝さんは何十回と台本を読み込んでいくうちに、最初の激しい喜怒哀楽の感情を含んだまま、読み方がフラットになっていくとおっしゃっていました。淡々とした読み方の中に、感情が入っていくと言うんです。

私は絵を描く時、その物語と共感する部分を探るところから始めます。共感するものがないと、何も伝わりません。まずは先生が作品を好きになり、子どもたちにうんと物語のドキドキ感を伝え、読む楽しさを教えていただきたいと思っています。



ごんぎつね (偕成社) 新美南吉 / 著 黒井健 / 絵

PROFILE

くろい・けん ● 1947年新潟市生まれ。新潟大学教育学部中等美術科卒業。学習研究社の幼児絵本編集部で絵本の編集に携わり、1973年にフリーのイラストレーターとなる。以後、絵本・童話のイラストレーションを中心に活動。1983年、サンリオ美術賞受賞。『ごんぎつね』『手ぶくろを買いに』（いずれも偕成社）をはじめ、絵を担当した絵本は230冊を超える。2003年5月に山梨県の清里に私設の「黒井健絵本ハウス」を開設。全国各地で展覧会や講演会も行っている。

自分を基準にしないで、それぞれの感じ方を認めてあげて欲しい